

現代における多様なコミュニティを繋ぐ

活動，関心，アーキテクチャの研究

小林 佑輔

この研究では、本学上野研究室や現代GPプロジェクトと地域活動との協働の過程を通じて、現代の地域における人々の繋がり方はどのようなものかを明らかにすると同時に、どのように可視化出来るか、記述の方法を探った。単に相互のネットワークとして描写するのでは、繋がり方を記述することはできず、どのような活動，関心，アーキテクチャを共有しているか、という点への着目が重要であることが明らかになった。

キーワード：地域，社会的ネットワーク，ソーシャルメディア

1 研究の背景と目的

Elizabeth Bott による1950年代ロンドンの家族についての調査研究によれば、「都市家族の直接的な社会環境は、組織化された集団ではなくネットワークによって構成されており、「都市の家族は孤立しているのではなく、閉鎖的なコミュニティと比べると、高度に個化している」と述べている。また、Mark S. Granovetter の「弱い紐帯の強さ」についての論文においては、「人と人との弱い紐帯こそが、社会解体（アノミー）ではなく、全体的な社会統合をもたらすと主張した。」（注1）

しかしながら、現代は、郊外化とweb，モバイルなどのソーシャルメディアによって人々の繋がり方が大きく変わりつつある時代である。

ここでは、現代の地域における人々の繋がり方はどのようなものかを明らかにすると同時に、どのように可視化出来るか記述の方法を探る。

2 研究の観点・対象・方法

この研究では、現代における人々の繋がり方を明らかにするために、「状況的学習論」及び「社会的ネットワーク論」の観点を用いて、都市における様々なコミュニティにおいて活動する人々がどのような媒体・活動を通じてネットワークを構築しているかを記述、分析する。

研究対象は、筆者の所属する本学上野研究室及び関わりの深い市民活動のキーパーソンを中心にしたネットワ

ークである。また、人々の繋がり方の分析において、近年活用されているソーシャルメディアにも焦点を当てる。

研究の手法としては、筆者自身や筆者を取り巻くネットワークにおける、対象となる人物へのインタビュー調査や、関係団体への参与観察等を試みた。

3 フィールドワーク成果

3.1 上野研究室と地域活動団体との繋がりの変遷

ここでは本学上野研究室と地域活動団体がいかに繋がりを形成してきたかを記述していく。（図1）

上野研究室の地域研究の発端となったのは、都筑区で活動しているNPO 法人 I Love つづきのデジタルマップ作成の支援活動であった。地域情報のデジタル化という共通の関心が、その後の継続的な協働関係の構築に寄与した。また、I Love つづきは港北ニュータウンにおいては比較的歴史の浅いコミュニティであったが、メンバー内部にいくつかのコミュニティに属し、橋渡しの役割を果たしているメンバーがいることにより（注2）、I Love つづきをとりまくネットワークの広がりを実現している。

こうした背景によって、I Love つづきからの紹介で、地理的・関心的にさらに広い範囲で活動している横浜コミュニティデザイン・ラボとの面識を得た。ここからさらに、NetCommons 活用事業やソーシャルメディア研究会、横浜経済新聞等といった、市民活動におけるメディア活用に関して強く関心を持つ人々との繋がりが形成された。横浜コミュニティデザイン・ラボと上野研究室は、ソーシャルメディアに対する関心を共有しており、それらに関するイベントや勉強会等を通じた協働が、相互の繋がりの継続を可能にし、また、新たな活動やweb システムのアイデアを生み出す原動力となっている。

また，NPO 法人 KOMPOSITION との繋がりも，ソーシャルメディアへの関心の共有によって形成された。2006 年に，本研究室の古沢は，松村が開発した地図サービス「mapwiki」を用いて，渋谷に点在したストリートアートの活動を可視化する「渋谷グラフィティマップ」を web 上で公開した。この「渋谷グラフィティマップ」が，マイナージャンルの表現者に開かれた表現の場所を提供する活動を行っている KOMPOSITION の関心を喚起し，その後のコラボレーションするきっかけを作った。（注 3）

この他に上野研は，2006 年以来，松村を媒介として，若手 web 技術者であるギークのネットワークと繋がりを持っている。こうした研究室内ギークは，研究室のその他のメンバーが間接的にギークのネットワークに触れることを可能にし，技術獲得を手伝っている。

上野研究室のネットワーク

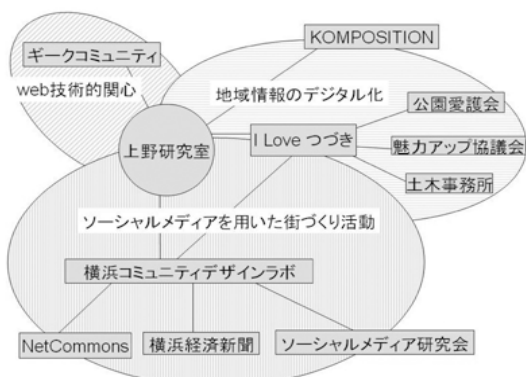


図 1 地域活動における上野研究室と関連コミュニティとのネットワーク

3.2 関心の共有を通じた実践共同体のネットワーク形成

本調査は，筆者をとりまくネットワークが，共通の関心，テーマ，コンテンツを通じて繋がっていることを示している。こうした共通の関心を持つもの同士が，プロジェクト・イベント開催等の実践を通じて，そこから新たに生まれるアイデアをもとに，さらなる活動・実践に繋げている。（図 2）また，あるグループとの協働を通じて，そのグループが持つ別のネットワークにアクセス出来る可能性を得られる。こういった繋がりを持続・継続していく上で，twitter を始めとするソーシャルメディアは重要な役割を果たしている。この結果は，現代における人々のネットワークがどのようなものであるかの一端を示していると考えられる。

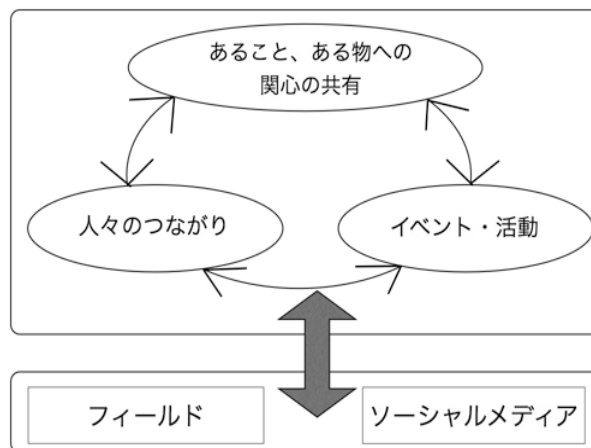


図 2 地域活動における人々の繋がり方に関する図式

4 考察

繋がり可視化する試みは，繋がり構築するリソースの在り方を紐解くものである。本研究では，従来の「弱い紐帯」論のような，ネットワークの「つながり(ties)」のみに着目するのではなく，その裏付けとなる共通の関心やコンテンツ，その共有の経緯といった諸要素を明らかにする試みを行った。

また，本研究が明らかにしたギークや地域の人々との繋がりを含むネットワークは，現代における web 技術の学習環境のあり方を示していると考えられる。（図 3）

上野研×ギーク

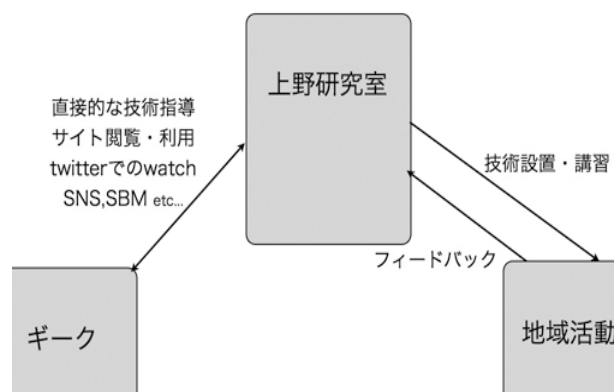


図 3 研究室を媒介とした地域活動への技術提供と実用からなるフィードバックの図式

<注例>

- (注 1) 野沢[5]における文献解題による
- (注 2) 柳井[3]による
- (注 3) 古沢[2]による

参考文献

- [1] 岩室晶子「都筑区「I Love つづき」の市民活動」
横浜市立大学国際総合科学部ヨコハマ起業戦略コ
ース, 村橋 克彦『横浜まちづくり市民活動の歴史
と現状』, 17-37, 学文社 2009
- [2] 古沢剛『グラフィティコミュニティのためのマップ
のデザイン』上野研究室学士論文, 2-15-2-16, 2007
- [3] 柳井義規『街づくり活動から見る港北ニュータウン
の歴史と現状』上野研究室学士論文, 2-1-2-2, 2008
- [4] Bott, Elizabeth (1955) 「Urban Families :
Conjugal Roles and Social Networks(1955)」. 野
沢慎司 (翻訳) 『リーディングス・ネットワーク論
—家族・コミュニティ・社会関係資本』, 35-95, 勁
草書房 2006
- [5] Mark S. Granovetter 「The Strength of Weak Ties
(1973)」. 野沢慎司 (翻訳) 『リーディングス・ネ
ットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』,
123-158, 勁草書房 2006

(指導教員 東京都市大学 環境情報学部教授
上野 直樹)